

## —スタッフ—

| 役 職                      | スタッフ名 |
|--------------------------|-------|
| 周産期センター新生児医療センター長<br>兼部長 | 住田 裕  |
| 新生児科部長                   | 和田 芳郎 |
| 医 長                      | 山本 昌周 |
| 医 員                      | 今西 洋介 |
| 非常勤医員                    | 竹中 朋代 |
| 非常勤医員                    | 山本 真也 |
| 非常勤医員                    | 竹村 亮  |

## —概要—

周産期センターの概要で述べた通り、今年度の陣容は、常勤医4名(昨年度より1名増)、後期研修医3名(昨年度より2名増)、計7名である。

外来診療は、昨年度から1名の小児科専門医が外来専従で応援に入ってくれたこともあって、午前の一般診療は月曜～木曜まで2診制を確保し、金曜は3診制である。その他、慢性外来、1ヶ月健診、生後2週健診、専門外来として循環器外来(第2金曜、完全予約制)を行っている。予防接種は、これまでのルーチン業務としてRSウイルス抗体、他院での接種困難児を対象にインフルエンザワクチンの接種を継続している。

泉州二次医療圏における小児救急医療体制に関しては、2006年11月3日にオープンした泉州北部小児初期救急広域センター(日曜、祝日、年末年始、の9:00～22:00、土曜の17:00～22:00)がその機能を維持している。入院が必要と思われる患児は、その診療時間帯に後送病院として、輪番制で行っている従来の泉州地区7病院(和泉市立病院、泉大津市立病院、市立岸和田市民病院、岸和田徳洲会病院、市立貝塚病院、りんくう総合医療センター、阪南市民病院)に紹介され、そこで最終的に入院の要否が決定される。また、消防隊からの救急車による搬送も当番の輪番病院に集められる。広域センターの終了後、23時以降は、その日の輪番病院で従来の夜間小児救急が行われている。当院の小児救急輪番担当日は、毎月偶数週の日曜日17:00～23:00が広域センターからの後送病院担当、同23:00～翌6:00が一次救急診療対応時間帯である。昨年度スタッフ減のため縮小せざるを得なくなった小児休日夜間救急も元の体制に戻すことができた。

当センターにおける小児科医の確保は非常に大きな問題であるが、泉州南部の小児科医も高齢化によってその数の減少が顕著となってきている。公的な乳幼児健診や休

日小児救急に参画できる小児科医の減少につながり、危機的状况に陥りつつある。

まず、市町村の乳幼児健診に対して、これまで泉佐野市の4ヶ月児健診、経過観察健診(二次健診)に毎月それぞれ1回、熊取町の4ヶ月児健診に年2回、担当医として参加していたが、泉南市、熊取町で医師不足が顕著となり、泉南市には、4ヶ月児健診、1歳半健診をそれぞれ月1回、経過観察健診を月1回(1人は毎月、もう1人は偶数月)担当することとなった。熊取町へは月1回の派遣となった。全体的には、これでも小児科医はまだ不足である。

医師不足は、予防接種を実施する医療機関の減少にも及んだため、当センター出生児対象にBCG(集団接種のため)、ロタウイルス(生ワクチンのため)、子宮頸癌ワクチン(副作用に対する国の方向性が曖昧なため)を除いて、定期接種、任意接種を再開することとした。委託契約は貝塚市、泉佐野市、熊取町、田尻町である。いずれ泉南市も含める予定である。

次に、休日小児救急であるが、こちらも泉佐野泉南医師会から参加できる小児科医の減少により、休日診療所(一人で小児科を担当)を維持することが困難となり、当センターから偶数月第3日曜10～17時を担当することとなった。

以上の状況は、ここしばらく持続することが予想され、当センターの小児科医は病院内にとどまらず、広く地域医療に携わることとなった。しかし、当センターの小児科医数を維持することも困難な状況にあっては、将来的に不測の事態が起こらないとも限らない。泉州医療圏南部における全体的な小児科医不足は、今後の大きな課題となっており、何らかの手立てが至急に必要である。

## —実績—

昨年度一年間に外来を受診した患者さん(生後2週健診、1ヶ月健診、予防接種を含む)の延べ数(輪番救急外来受診患者を除く)は7,971人、月平均約664人で、昨年度より約420人の増であった。泉州医療圏の夜間休日小児救急輪番が例年通りに復帰したことによって、その受診児数は497人と通常レベルに戻り、1回平均約21人であった(表1)。入院児数は23人(4.6%)、受診児の重症度は相対的に低く、前年度の入院率4.7%と差がなく、この傾向に変わりはなかった。

小児科一般病室の入院患者数は延べ167人、昨年とほぼ横ばいであり、輪番救急外来からの入院児が占める割合は13.8%であった。表2に入院児の主診断を示す。例年通り、肺炎、気管支喘息、喘息様気管支炎、RSウイルス感染症、ウイルス性腸炎など急性感染症が大部分を占めていたが、周産期センター開設以来、新生児黄疸の光線療法治療入院の割合が高く、この傾向は今年度も同様であった。病診連携によって紹介された患者さんの入院数は53人、入院児全体の31.7%であった。

表1 救急外来受診児数

|      | 2次救急<br>(17時～23時) | 1次救急<br>(23時以降) | 計   |
|------|-------------------|-----------------|-----|
| 受診者数 | 113               | 384             | 497 |
| 入院者数 | 16                | 7               | 23  |
| 救急搬送 | 55                | 35              | 90  |
| 紹介者数 | 12                | 6               | 18  |

(平成25年4月～平成26年3月)

表2 入院児主診断名

|                 |    |
|-----------------|----|
| 感染症・寄生虫症        |    |
| カンピロバクター腸炎      | 1  |
| 細菌性腸炎           | 1  |
| ロタウイルス性胃腸炎      | 8  |
| ウイルス性胃腸炎        | 6  |
| 細菌感染症           | 2  |
| カポジ水痘様発疹症       | 1  |
| ウイルス性肝炎         | 1  |
| 血液・造血器・免疫疾患     |    |
| 血小板減少性紫斑病       | 1  |
| 好中球減少症          | 2  |
| 発熱性好中球減少症       | 1  |
| 周産期疾患・先天異常・保育   |    |
| Rh 溶血性疾患        | 1  |
| 新生児高ビリルビン血症     | 14 |
| 内分泌代謝疾患・栄養障害    |    |
| 糖尿病             | 1  |
| 成長ホルモン分泌不全性低身長症 | 5  |
| 脱水症             | 1  |
| ケトン血性嘔吐症        | 1  |
| 筋骨格系・結合組織疾患     |    |
| 膝関節症            | 1  |
| 川崎病             | 6  |
| 不全型川崎病          | 1  |

|                  |   |
|------------------|---|
| 神経系・感覚器疾患        |   |
| てんかん             | 1 |
| 嘔吐症              | 1 |
| 不明熱              | 2 |
| 熱性痙攣             | 7 |
| 痙攣重積発作           | 4 |
| 体重増加不全           | 1 |
| 消化器疾患            |   |
| 急性虫垂炎            | 2 |
| 腸重積症             | 2 |
| 急性膵炎             | 1 |
| 皮膚・皮下組織疾患        |   |
| 伝染性膿痂疹           | 1 |
| 泌尿・生殖器疾患         |   |
| ステロイド抵抗性ネフローゼ症候群 | 1 |
| ネフローゼ症候群         | 1 |
| 腎盂腎炎             | 1 |
| 尿路感染症            | 5 |
| 精神障害             |   |
| 薬物誤用             | 1 |
| 神経性食欲不振症         | 1 |

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 呼吸器疾患                 |    |
| 細菌性咽頭炎                | 1  |
| 急性咽頭炎                 | 3  |
| 連鎖球菌性扁桃炎              | 1  |
| 急性扁桃炎                 | 1  |
| 急性喉頭気管炎               | 1  |
| 急性上気道炎                | 4  |
| インフルエンザ               | 3  |
| マイコプラズマ肺炎             | 1  |
| 細菌性肺炎                 | 1  |
| 気管支肺炎                 | 7  |
| その他の肺炎                | 6  |
| マイコプラズマ気管支炎           | 2  |
| クループ性気管支炎             | 2  |
| 急性気管支炎                | 5  |
| RSウイルス細気管支炎           | 18 |
| 気管支喘息                 | 12 |
| 喘息性気管支炎               | 6  |
| 損傷・中毒・アレルギー           |    |
| 異物誤嚥                  | 1  |
| 食物性アナフィラキシーショック       | 1  |
| 循環器疾患                 |    |
| 腸間膜リンパ節炎              | 3  |
| 左腋窩リンパ節炎              | 1  |
| 紹介入院率<br>53/167=31.7% |    |